

取手市民のため  
「藤井しんご」  
の市政活動を  
支援します

# 取手新時代をひらく会 しんご通信 第36号

■発行人 藤井信吾 ■発行責任者 取手新時代をひらく会 石井信光 ■事務所 〒302-0004 取手2-14-24 竹内ビル2階 ■TEL&FAX: 0297-72-5616

## ウェルネス・タウン取手の創造！大前進

### 「速やかな政策実現こそ市民共通の利益」

### 藤井代表と勉強会

取手新時代をひらく会は、今年3月に市長である藤井代表と「取手市のこれから健康・医療・福祉・環境・産業」について勉強会を開きました。その目的は、二期目のマニフェストに掲げたウェルネス・タウン構想の身を一つ半解の知識でなく、正確に理解して、その情報を多くの仲間へ発信していくことにあります。本号は、そのダイジェスト版として編集、前段に当日の藤井代表の話題提供の要旨、後段には会員との質疑応答をQ&A形式で掲載しました。

### 話題提供の要旨

- 一、ボックスヒルの線路側傾斜地(C街区)を某医療機関が落札した問題は市の公募入札方法、市民の利益・公共性、および不動産鑑定等に全く問題はありませぬ。本件は、茨城県も同様に認識しています。会員、市民の皆様には安心していただいで結構です。
- 二、平成21年の年代別人口は、団塊世代が最高であるのに対して、働く世代の人口は団塊世代の約70%です。働く世代や若い世代の人口を高めることは行政の重要な使命だと思っています。これからは取手市の施策に、この考え方を反映させていきます。
- 三、急務であった行財政改革は確実に成果を納めています。今後は、市民サービスの質的向上や安全・安心の観点から老朽化や分散化している公共施設を再編整備していきます。
- 四、持続可能な環境都市づくりの一環として、防犯灯を含む省エネ対策や心身の健康づくり対策を支援していきます。これからは市民と行政が一体となって、魅力ある街づくりをハード・ソフトの両面から積極的に進めていきます。
- 五、取手市の産業戦略については、地域産業活性化協議会の設立・活用や産業活動支援条例の制定により、企業誘致等に努めてきましたが、なお土地利用の転換を国などに要請しながら、ふれあい道路沿線の一体的土地利用、キリンビル周辺の商業モータリ化、紫水地区開発、ゆめみの駅周辺の宅地・事業所の整備、地場産品アンテナショップの展開などを推進します。
- 六、ウェルネス・タウン取手の創造、その他の取り組みについては質問を受け、それに答えていきます。

### 会員との一問一答

Q 白山前交差点、四谷橋、井野台へのルートはいつ完成しますか。東西の利便性が変わると同時に、人の流れも変わってくると思います。

A 白山前交差点の改修、6号線沿いの沿道型商業・都市型住宅予定地の区画整理に伴う造成工事はすでに始まっています。今秋に、道路は部分開通し、準備が整えば、商業予定地にはガストが新装開店する予定であると聞いております。

Q メディカルセンター周辺の開発状況はどのように進んでいますか。駅に通じる「回遊空間」として、デザイン的にも、人間工学的にも興味を持てる発想だと思っています。

A メディカルセンター(仮称)は既に工事が始まっています。沿道型商業地域にあつたガストが一時立ち退き、次の工事に着手できる状況にあります。この土地区画整理事業を加速させて、はなのき通りから南北方向に治助坂と並行する道路を早期に開通させます。

これらを企業、学校関係のバス待機場所とすることによって、駅前混雑解消を図ります。



藤井代表と会員との勉強会 (2012年3月)

Q 健康・医療は、これからの社会にとって共通のキーワードですが、一方では若者が働く、学ぶ、遊ぶに相応しいウェルネス・タウン取手でなければ、将来の人口構成やバランスある駅前発展を損なうことになりませんか。考え方や具体案を開示してください。

A それには、ウェルネスプラザやライフスタイルショッピングセンター(仮称)を早期に完成させるのが最良策と考えています。概念的には、取手市の完成予想図(写真のイメージ)です。ウェルネスプラザ内に収容能力300人程度の多目的ホールを26年度中に整備をして、演奏会や各種セミナー、パーティー等ができるようにします。取手で活動している合唱団や芸術グループから強い要請があります。

Q 子育て世代にとつては、安心して預けられる託児所や保育所がどうしても必要です。特に、共働き夫婦にとつては、駅に併設、あるいは隣接する託児所等の確保は定住化を促進すると思われませんか。

A ウェルネスプラザに親子プレイルームの設置を進めることや民間による保育施設の開設支援などに取り組めます。

Q 取手は、市内に東京藝大、江戸取中・高取手聖徳女子中・高のある教育環境都市でありながら、街中に若者は少なくありませんか。

A 駅周辺に学生や若者が集える空間(喫茶室、本屋、楽器店など)ができるよう努力します。東京藝大に関しては、卒業作品を購入・展示したり、大学院生を招いて新春音楽会等を定期的に開いています。また今年の「取手宿ひなまつり」において、ジャズフェスティバルを開いたところ、市内内外から若者や子供連れの家族がたくさん集まってくれました。

4月には、若手事業者が呼びかけた「取手・飲食店復興プロジェクト」が大成功、次いで新しく取手市民になられた方々とのふれあいイベント「ようこそ取手」が企画されています。

Q ゆめみの駅周辺の住宅開発や工場誘致は如何に進展していますか。

A すでに店舗や住宅が建設されています。URの住宅用地では戸建住宅として40件ほどの申請があり随時着工しています。また、事業用地については、用地取得済の某企業は市場動向を伺いながら工場建設の準備を進めています。他の事業用地についてもいくつかの企業から打診があり、企業誘致の進展に期待しています。

Q 市民と約束したマニフェストにあるFM防災放送は実現可能ですか。

ウェルネス・タウン取手の創造

取手駅・ボックスヒル

ライフスタイル型ショッピングセンター

(仮称)メディカルセンタービル

ウェルネスプラザ

白山前交差点

東口駅前高層マンション

沿道型商業・住宅ゾーン

現在地

四谷橋 至る

国道6号線

歩道橋

白山小学校

土浦

東京 至る R6

駅を望む6号線沿いの工事

(仮称)メディカルセンター予定地の区画整理造成工事

注) これはイメージ図で、実際とは異なります。



黒板を使い説明する藤井代表、約2時間の勉強会。

**A** 事前調査等を終え、設置に向けて関係省庁と協議中で、今年中には具体化できると考えています。そこで、緊急情報等を確実に、正確に伝えるため、放送内容の技術的検討に入ります。

**Q** ウェルネス・タウン構想に関する市議会での一部議員の反対動議、あるいは発言の趣旨に違和感を感じるという市民の声をよく聞きます。このような事態の続くことは、取手市の発展を妨げるばかりではなく、市民レベルをも疑われない状況だと思えます。

**A** 議会基本条例の第一条では、市長はじめ議員は、「地方自治の本旨に基づき市民の負託に的確に応え、市勢の伸展と市民福祉の向上に寄与すべき」と明記されています。

これは行政を担うものとして、当然の責務であることから近未来を見据えた新生取手のビジョンと、具体的な処方箋づくりを議会等で真摯に論議し、その具体化に取り組んでいきます。

今まで、全く動かなかった取手駅西口北土地区画が市民および関係者の協力と支援によって、着工の運びとなりました。これが契機となって、西口の駅周辺ゾーンの再生が進み、さらには東口駅前も活気づくと確信しています。

最後に、ウェルネス・タウン取手の創造に関する推進計画、現状や諸課題等について、茨城新聞、市の広報や薬（ひこばえ）等に紹介していますので、併せてご覧を頂きたいと思えます。

**投稿** ウェルネス・タウンと水辺ウェルネス川を活かして 自転車道

健康づくり・まちづくり

NPO小貝川プロジェクト21

理事長 井草雄太郎

私たちが、これまで係ってきたテーマは水辺で人と人が交流し、コミュニティを育み、元気づくり、健康づくりを目指すというものでした。具体的には小貝川をフィールドにして、ボートやカヌー遊び、ボニー乗馬やサイクリング、カイトや気球による空中散歩、といった水・陸・空を活用した三次元プロジェクトに取手市や国土交通省と協働で取り組んでいます。

取手市がまちづくりの中心軸として提唱するウェルネス・タウン計画は、あらゆる施策にウェルネスのDNAを組み込んで発信していくものと解釈すると、私たちが活かした地域づくり「自転車道行こう！」の事業プログラムは、その一つに数えることができます。

この取り組みは、川・まちを自転車道つなぐ、実際にはまちの歴史・文化に触れながら健康づくりやコミュニティづくりを通して、自転車の日常利用の普及に努めるもので、3年前から取り組んでいます。

自転車はウェルネスのツールとして室内でも高く評価されていますが、さらにアウト・ドアでの活用はレジャーやスポーツの余暇・運動の分野から、通勤通学やショッピングの移動手段、生活習慣病や介護予防の医療分野まで多種多様です。

取手市は日本一の流域をもつ利根川、関東三大堰をもつ小貝川、牛久沼など、豊富な水辺に恵まれています。水辺空間は、これまでもサッカーや野球場、各種イベントや伝統文化の行事に利用されてきています。これは市民にとって大きな宝物であると思えます。

今後も、取手市や茨城県、国土交通省にご支援を頂きながら、整備が進む利根川・小貝川の堤防を活用した事業（サイクリングマップの作成など）を進めていきます。

県南総合防災センターで開かれた市民フォーラムにおいて、発表された3人のパネラーの大意はつぎのとおりです。

**パネラー**

取手市長 藤井信吾

取手市は、首都圏のベッドタウンとして大きく発展してきたために、人口構成に偏りがあります。20年後には高齢者数だけでも大幅に増えると思えます。いまから、将来を見据えて取り組まなければならぬのは行政改革による丁寧な行政サービス、地場産業振興による長く働ける雇用の確保・拡大、更には地域力・市民力を高めることだと考えています。

地域力を高めるといえるのは、言い換えれば、市民自らが行政とのコラボレーションの中で、自分たちの生きがいや誇りが感じられる地域社会へと成熟させていくことだと考えており、それによって心が健全、かつ充実した生活が送れると考えています。

この発想が「ウェルネス・タウン構想」の最も大切な部分です。自転車道と言えばハブにあたる部分です。種々の事業分野において、ウェルネスをコアにまちづくりを展開しようとするものです。既に、サイクリングロードやヘルスロード、健康遊具やベンチの整備をしています。水辺ウェルネスの充実が、健康でハツラツとした多くの市民がお互いを認め合い、助け合えるようなコミュニティを形成するのに必要不可欠だと考えています。

つぎに駅周辺の中心市街地の空間づくりにもウェルネスが生かされようとしています。通勤・通学者だけが駅を利用するのではなく、駅を買い物や待ち合わせ場所として利用する人たちが楽に行き来できるフラットな道路・回遊づくり、さらにはアート・スポットの他に、健康・福祉施設エリア、医療施設エリア等を順次に整備していきます。

具体的には、駅周辺をゾーンとするバリアフリー・フリー回遊空間をつくり、安心して歩けるウォーキングコース、拠点としての介護予防施設や健康トレーニングジム、駅前のレンタサイクルなどのハードを整備しますが、従来の発想と異なるところは利根川・小貝川の水辺空間、取手固有の史跡や商店街の街並み空間のソフトと同化できるように配慮することです。

**パネラー**

工学博士 古倉宗治

今回の震災では、実に自転車が頑張ってくれました。環境の視点で言えば、例えば都内の自家用車の半分以上が5km以内の移動ということから推察すると、現実問題として車の数は半分で済む計算になります。

健康問題に置き換えると、自転車の継続利用は生活習慣病を抑制するなどのウェルネス効果が出ています。徒歩やジョギングと比べて特別時間をとらなくとも通勤通学や買い物に自転車を利用すれば、いい健康法となります。自動車との簡単な経費比較でも、年間1千600億円の燃料費と、2千200億円の医療費削減が可能性になるかもしれません。

**パネラー**

サイクルライフ ナビゲーター 絹代

流域の魅力は自然環境、生きもの、歴史、文化スポットだけではなく、多くの自治体は、流域全体の魅力、エコミュージアムとしての魅力、そして水辺空間そのものが財産という考え方をします。

自転車道で軽快に走ると、温度、湿度、風の香りを自分の五感をフルに使って自然が体感できます。自転車道は、歩くよりも行動範囲が広がりますし、走らせる努力は体脂肪を燃やし、代謝をアップさせ、結果的に生活習慣病や老化防止、ストレス症状などを緩和してくれます。同時にストレス耐性を強化

し、免疫力を高めてくれます。一方で、自転車は体にやさしい乗り物です。サドル・ペダル・ハンドルの3点支持により関節負担が少なく、上半身が揺さぶられないので内臓の揺れが小さく、ゆっくり乗れば疲れることなく、競技選手のように乗れば鍛えられ、自在に持ち主に合わせてくれるのが最大の利点です。

ウォーキングに比べ、股関節を強化し転倒防止に効果的で、階段を一段飛ばしで上るくらいに匹敵します。筋力が上がると代謝がよくなり肥満防止につながる他に、糖尿病等の生活習慣病の予防に効果的です。

私達は水辺空間に親しみを持つことで癒される事から水辺での活動は更に効果を発揮します。また、アクティブレストと言って、疲れたときほど家を出て、人と話したり体を動かして酸素をたくさん吸うことにより、疲労回復が早まります。動かし続けることは老化も防止します。

今回の市民フォーラムは、これで終了しますが、自転車道ツールに、利根川・小貝川の水辺空間を健康づくりや市民の活力アップのツールとしてウェルネス・タウン構想に取り入れられることを願って閉会と致します。

**投稿**

小貝川を散歩して

春は遠いのか

ひらく会会員 馬込寛男

春が来た。小貝川にも春が来た。何時も天気の良い日に小貝川の土手を散歩しているが、今年は4月になっても最高気温は17度であつても、最低気温が0〜5度位と低いため、まだ土筆も芽が出てこない。「雲雀」だけは元気に飛んでいる。地球寒冷化の時代に突入したのかなあ。散歩している人を見ると大半が高齢者で、病後のリハビリだったり、主婦の数人がおしゃべりしたり、子供連れがのびのびと散歩している。運動公園に行くと、陸上競技場の中ではサッカーの練習、テニスコートでは男女が仲良くプレーしている。土曜日・日曜日になると、野球場で少年達が一生懸命練習や試合をしている。乗馬をしている人もいて、のどかな散歩コースだと思ふ。(編者注: 門木消防署裏の公園一帯に少ない。利根川と小貝川に挟まれて、おいしいお米もとれて市民も豊かに生活できる、田園都市かもしれない。)



藤代運動公園 2012.4.9

**編集後記**

取手新時代をひらく会は、月に一度、ワイガヤ会と称して座談会を開いています。近々の話題はもっぱらウェルネス・タウン構想ですが、噂や嘘に振り回されるのはもう御免という憤りです。

私達は正確な情報を一人でも多くの人に伝えるために、そのエネルギーを使うことにしました。このような方針で36号を編集しました。

(編集長 井上君夫)



小貝川

利根川